

沢 知恵さん

うたの力

1971年生まれ。日本、韓国、アメリカで育ち、3歳からピアノを弾く。
東京芸術大学楽理科在学中にデビュー。
28枚のアルバムを発表。第40回日本レコード大賞アジア音楽賞受賞。
「日本語をもっとも美しくうたう歌手」と評され、東京での季節公演をはじめ、ハンセン病療養所、災害被災地、少年院などでも活動。生後6ヶ月からかわりがある香川県の大島青松園では、2001年から毎年コンサートを行っている。

——まずプロフィール的なことから。

沢● 父が牧師だったんです。それも戦後はじめて韓国に留学した日本人です。1967 年。1965 年が日韓国交正常化の年ですから、その直後です。自分は韓国の人の隣人になるという。延世大学の語学堂というところがあるんですが、今は日本人があふれてます。当時は父一人。だいたい欧米からの医師とか宣教師が来てた時代です。そして韓国人と同じものを食べて、韓国語をすっかりマスターして、「沢さんは日本語も上手だね」って言われるくらい韓国語ができるようになった。同化したわけです。そしてその延世大学のキャンパスで出会ったのが私の母です。当然ながら本人にもリジェクトされたんですが、まわりも大反対です。日本サイドも韓国サイドも、日本で結婚なんていう時代です。それで父は、「僕は日本人でという理由で断られるのは納得できない。一人の人間として見てくれ」というわけで、母も折れて結局その情熱に負けて結婚し、そして日本に来たのが 1970 年 2 月 14 日。そしてその 1 年後のバレンタインデーに私が生まれたんです。

私が生まれたのは川崎市の桜本なんですけど、大阪の生野のような在日コリアンの街です。私は 2 才までしかいなかったんで、まったく私の中では記憶がないんですけど、在日の街で生まれたってことは何か意味があるなと最近思うようになって、今行って街角に立つと懐かしいんですよ。父は牧師として桜本の教会に赴任したわけです。私はいわゆる在日ではないんですよ。でもこれ逆で父が韓国人だったら私の名前は沢知恵じゃないはずなんです。そして私のパスポートも父が韓国人だったら違ったかもしれない。そう考えると、これはジェンダーとか家父長制の問題にも関わってきますけど、たまたま母が韓国人で、私はずっと日本の国籍でいたってことで、在日コリアンのカテゴリに入っていないんです。在日の人に会ってシンパシーを感じるということもあんまりないんです。ただ在日の人達の経てきた痛みというのか苦しみとか、今もなお続いている差別があるわけです。そういうときに怒りが湧いてきます。私だって 1/2 はコリアンなんですけど、でも在日ではないという複雑な気持ちがわいてきますね。で、有難いことに小学校 1 年から 3 年と、高校 1 年の時にアメリカにいたんです。アメリカってところはダイバーシティの国ですから、何人であってもそんなの大した問題じゃないというか、人と違う事が当たり前でうまくやっていこうという国なので、私がそこに幼少時に身を置けたということは解放



されたんだと思います。

父と母は今思うと大変すぐれた人達で、お互いの言語が完璧にできて、二人とも英語がペラペラなんです。そういうことってあんまりないですよ。ですからアメリカに行ったら家庭内の言語が英語になっていくんですよ。日本人同士の夫婦だったら、家庭内の言葉は日本語で、週末になると子ども達は日本語スクールに通わせたりして、帰国したときにちゃんと日本語がしゃべれるようになってやるんですよ。我が家はね、行った国の言葉を家庭内でしゃべるんです。韓国に行ったらだんだん子供が韓国語になってくると、いつのまにか韓国語になるんです。私ね、それを当たり前だと思ってたんですが、そうじゃないんです。ある時私は母に、いったい私を何人に育てたかったの？と聞いたんです。アイデンティティというか教育方針ですよ。すると母は「国籍だとか民族だとか、そんなものは大した問題じゃないんだよ。キリスト教の信仰さえ受け継いでくれればそれでいいんだ。あなたの国籍は天にあるんだ」と言うんですよ。「は一あ」と思って。なんてかっこいいんだと。二人とも牧師ですから。それは半分くらいは言い訳めいたことだったかもしれないんです。というのは父も母もどの国に行っても必死で生きてたんです。だけどそれ



は本心でもあると今思っていて、私の両親が私に授けてくれたことは垣根をとりはらうこと、そして一番大事な芯を常に持っている事だと思うんです。それを二人は体現してくれたというか、ほんとに垣根のない人たちで、わが家にはいろんな人が来てくれたけど、相手によって態度を変えるということを見せたことがないんです。クリスチャンであろうがなかなら、何人であろうが、右であろうが左であろうが、誰とでも同じようにつきあう人達だけど、自分の芯はもってた。私はいまこうやって親のいいことを言いますけど、もの

すごく反抗しました。(笑)でも自分が親になってわかることなんですけど。私のアイデンティティってあるようでないというか、私は私というのは歌にもしましたけど、日韓みたいなことは申し訳ないですけどないんです。在日の人と会うと傷みます。少しでも担えたらと……沢さん、在日のためにがんばってと言われると、はいがんばりますとつい言っちゃうんですけど、(笑)ほんとは在日じゃないんだけどなーって思いながら。それってすごく矛盾してるようにも思えるんですけど、在日の人より韓国語ができるんですよ。歴史がありますよね。三世四世になったら日本の文化で育ったわけですから韓国語はできないんです。でもだからこそ一生懸命やるわけです。ずっと問い続けてきたんです。私は何者でもないけどすべてであるという。

10 才まで 3 つの言語で育った。韓国語、英語、日本語を身につけたというのはほんとに大きな恩恵で、言語って文化と分かちがたいものだし、身体性の問題もあると思いますが、いつも自然でいられましたね。小学校 3 年生の終わりに日本に来た時には日本語がぜんぜんできなかったんです。ひらかなから学んで、日本語というのは最後に身につけた言語なので、肉体的には外国語としてつきあってます。歌ってるのはほとんど日本語ですが、私の強みであり弱みは、日本語を根っこにもってないということです。

——でも 10 才のあとはずっと日本なんですか？

●高校の時は 1 年アメリカでしたし、20 代の時もちょこちょこアメリカに行っていました。精神的にはアメリカがかなり強いんですね。でもリズム感は韓国なんです。2 才から 6 才が韓国で、人間にとってリズムは土台になるもので、文化変容の中でも最後が変わる要素はリズムだと言われてるんですけど。リズムは決定的にコリアンなんで

(4) 名前のない新聞 No.226 / 2021 年 11・12 月号

す。自分でわかります、それ。(笑)

しゃべってるのは日本語なんですけど、どこかいつも外側から。残念ながら。でもそのぶん、日本語の響きに対して日本人よりも敏感だし、貪欲だし、あーこんな素敵な日本語があるんだという発見は人一倍できる。日本語をはっきり発音すると言われます。それはやっぱり外国語だからだと思いますね。伝わってるかどうか不安なんでしょうね。

3才からピアノをひき歌手になりたいと思っていて、でも人には言わなかった。ピアニストはいいけど歌手というのは不良かと思われそうと言えなかったです。でもピアノだけでやっていくのはとても競争が大変なので、しかも私はアメリカで高校の時にジャズに出会って、譜面のない音楽の洗礼をあげて、クラシックから一歩身をひいたんです。で、日本に帰ってきて高校に入りなおしたらバンドブームだったんですよ。80年代の半ばです。猫も杓子もバンドをやってて、私も学校でバンドを組んではじめてマイクをにぎってボーカルをやったんです。都立高校で女の子だけのガールズバンドです。

人前で歌って拍手をもらえるのがこんな気持ちのいいことなんだと思い、それで元々私は歌手になりたかったんだと。その歌手というのは松田聖子みたいなものです。華やかな。で、とりあえずは歌手になったわけです。あちこちのコンテストに出れば私は賞をもらってスカウトもされるんだけど、このままデビューして消費されて終わるのは違う気がする。

——自分でそう思ったんですか。

●思ったんです。高校2年というところちょうど進路を考える時ですよ。ちょうど父がガンになったんですよ。そういう家庭の事情もあって、私は音楽とはなんぞやということを究めたい。幼いころから身近にあった音楽だけど、行った国によってちがう。いろんな音楽が存在することがわかって、人間にとって音楽とは何だろうということをやってみたいと思っていたら、音楽学というのがあるよと教えてもらった。

それを調べたら、公立は東京芸大が愛知県か沖縄が何力所かしかありません。母に言ったら冗談じゃないと。父がガンで死んで行くのに音大なんてありえないと。お金がかかりますからね。入るまでのレッスンが大変ですよ。みんな小さいころからやるわけです。両親はぜんぜん音楽の素養はないので。それで私はちょっと諦めモードになっていたら、母がその愚痴を友だちにこぼしたんです。そしてその友人が、東京芸大の楽理科に入るための特化した塾の先生を知ってるというんです。ICUの教授の奥さんが自宅を日曜日に開放して、全国から高校生を集めて指導して



たんです。定員が25名のうち16、7名はそこから入ると。飛行機とか新幹線で通ってくるんです。母は愚痴をこぼしただけなのに、「知ってるわよ」ってことになり、母とその友だちと行ってみたら引き返せなくなって、やりたいと。で、次の週から通い始めましたね。そして1年間通って、現役で芸大に入りました。

父が亡くなったのが高2の終わりなんです。それが分岐点でした。最後に父に会った時には、痛み止めの薬で私の顔もわからなかったのに、突然「知恵ちゃん、あなた音楽好きよね。音楽やりなさい」て言うんですよ。その前までは夫婦で音大に行くことは止めようと合意してたんです。そばに立ってた母は怒り心頭で「あなた何言ってんのー」と。私は号泣で「お父さんありがとう〜」て言いながらお葬式が終わって、そこから必死で勉強して、なんとか現役で入れて、音楽とはなんぞやと友人達と議論するイメージがあったんですが、誰も音楽とはなんぞやという議論につきあってくれないんです。もう失望ですよ。私なんのためにこんなところに来たんだろうと。それで学校を飛び出して、当時は夏休みが4ヶ月もあって、というのも先生たちは遠征に行っちゃうんです。芸大ってベートーベンとかある時代のある音楽が芸術だと思ってるところなんです。私はすでにジャズとか世界のいろんな音楽に眼をむけてたので、それでライブハウスで歌い出したんです。音楽とはなんぞやというのは表現しないとわからないと思って。

で、弾き語りしているところをスカウトされて、デビューしたのが20才です。1991年、パプルの最後にデビューで、今年30周年なんです。私の同期で福山雅治さんという人がいて、私が超大型新人で、彼はおまけだったんです。(笑) 忘れもしない。私のお披露目ライブというのが渋谷であって、もう一人

長崎から来た福山さんもどうぞって感じ？で、純朴そうな感じでぼろぼろって歌って、あんまり印象にも残ってなかったんです。でも彼はレコード会社や事務所の言うことをきっちり聞くおこうさんなんです。2、3年たってレコード会社ですれ違ったら、え？今のあの人？って。素敵に変身して王子様になって今に至るわけです。一方私は反逆児なので、ぜんぜん言うこと聞かないんです。そもそもデビューアルバムを作るという発想も私なかったんです。その前に母が学費を払わないと言うんです。「お前は音大に行くと言ったのに、勝手に行った。払わない」と。「他の大学もあんなに受かったのに、どうしてそっちを捨てて音大に行ったんだ。音大に行って何になるんだ」と。それ正しいですよ。非常に正しいことを母は言ったなと思うんですけど、当時母はほんとに怒ってて、払わない宣言をしたんです。実際一円たりとも払わなかった。当時国立が年間35万。今の半分です。35万なら家庭教師やればなんとかがりぎりまかなえるという目算でがんばったんですが、事務所にスカウトされたときに、何もしなくても月5万くれると聞いたんです。何もしなくてもというのはウソなんですけど、契約すれば、じゃあデビューどうしますかっていう話になりますよね。ところが私はいやちょっと待ってと。まだ20才なので、もっと人生熟して納得のできる歌を歌えるようになってからデビューしたいと。それで事務所は困って、誰とだったらレコード作りたい？プロデューサーの名前を言ってごらん、というので、ジョージ・デュークというグラミー賞をたくさん取ってるキーボーディストですが、その人の名前を出したらなくなるなと思って言ったら、1週間くらいして電話かかってきて、「沢ちゃんパスポートあるよね」と。LAでジョージ・デュークが会いたがってるっていうので3ヶ月ロスでレコーディングし、休学届けはエメールで出したんです。ところがそのあとレコード会社の言うことをぜんぜん聞かないので、たとえばNHKの歌番組に出る時も、プロデューサーがこれとこれを歌って下さいって言うんですよ。でも私は「いや自分で歌うものは自分で決めたいんですけど」と。そんなことを言う人はちあきなおみ以来だと言われて、そうこうしてるうちに評判悪くなりますよね。あいつは新人のくせに使いづらい。売れてもいないのになんだという話になって、だんだん下がっていきますよね。売りたいとも思ってなかったんですよ。自分の納得のできる音楽をやりたいと。メジャーの会社を2つ3つ渡り歩いたあとに、26才くらいで独立して、学校もぜんぜんまじめに行かなかったのに卒業論文だけは楽しくて、「北朝鮮のイデオロギーと音楽」というのを書いたんです。それが優秀論文に選ばれて、

華々しく卒業式のあとに発表会したんですけど、私、論文だけががんばって卒業できるのかどうかかわからなくて、ドキドキで、最低単位で卒業したんです。

それからは自分で事務所をつくって、コモエスタというレーベルをつくってやったんです。好きな仕事しかやらないとかできない。もうそれしかできないですね。売れたことがなくて最初から低空飛行ですから。コロナになって去年は全部中止になってショックはありましたが、基本一人会社でやってますけど、あんまり変わらないんです。

—— 岡山に来られたのはどういうことから？ 前は千葉に住んでたそうですね。

● 311のあと、千葉県松戸市というところがホットスポットになって、放射線量が高い。最初のうちはママ友同士で情報交換してたんですが、まもなく誰も何も言わなくなったんです。そして「国が大丈夫って言ったから大丈夫」って言い出したんです。私それは怖いなと思って、戦争ってこうやって起きたんだなと。上からの力とそれを下から支える力がこんなにもあったのかと。放射能も怖いけど、こういうものを言えない雰囲気の中で、共同体で子育てをしていくのは怖いなと思ったんです。松戸でこうだから、福島のお母さん達は想像を絶するものがあります。言いたいことなんか何にも言えなかったんだらうと。

で、私は早々に西へ行きたいと思ったんです。移住したのは2014年なんですけど、ハンセン病療養所の私が親しい人達が高齢化で相次いで亡くなったんです。焦りを感じていて、療養所がいよいよ終わっていくんだなと。いつもお葬式に間に合わないんですよ。朝死んだら、もう午後にお葬式やっちゃうんです。どうせ親戚が来ないから。いつも間に合わなくて、そばに行きたいという思いが高まって、2014年の春に、誰も知り合いがいないのに岡山に来ちゃったんです。もうその時には離婚してて、子供ふたりを連れて。

震災のこともあるけど、直接のきっかけは大島青松園ですね。高松と岡山で迷ったんですけど、仕事で全国を飛びまわらないといけなかったので、岡山にしました。それに私は長いキャリアの中でほぼ全都道府県を回っていて、岡山ではいやな思いをしたことがないんです。いつかこんなに空が広くて空気がきれいで食べものも美味しくて、人もさっぱりしててまあまあ都会的で、こんなところに住めたらいいなと思っていたんです。で、住んでみたらほんとに合うんです。災害がないから



歴史的に人々が助け合わないで済んでる。人は人、私は私というふうになって、よけいなお節介をしないんです。逆にいえば察して手を差し伸べてくれることもない。それを冷たいという人もいると思うんですが、これこれこういうことを助けて欲しいとお願いすれば、おしみなく助けてくれる人が現れる。それも最初から、私はここまで助けられるって言うんですよ。でもごめんなさい、こっから先はできませんと言うんです。最初はちょっと面食らったんです。でもみんな自分が大事で岡山の人はそれを最初から表明してくれるんです。その誠実さというか優しさというのはじんわり染みてきて、それが誠実さかなって思うんです。たぶん私がアメリカにいたからでしょうね。今は岡山に落ち着いて、ハンセン病療養所大島青松園に月2回くらい通ってます。

ハンセン病の島へ25才の時に父が亡くなってから叔父達 挨拶に行った。そうしたら入所者のみなさんが棧橋に並んでみんな待ち受けてた。「ともえちゃん」てぼろぼろ泣いてるわけです。ハンセン病の回復者を何十人も生で見たのははじめて。自分には記憶はないが、生まれてすぐ半年くらいの時に行ったことがあるんです。それをみんな覚えてて、「大きくなったねー」と言われた。「あんたはねー、床をはいはいしとったんよー」と言うわけです。そして園の教会の日誌を見ると、今日は知恵ちゃんの誕生日だと書いてて、みんなで祈ってるわけです。それにはもうお手上げですね。(笑) そこから私はちょくちょく大島の療養所に通うようになって、彼らと深い関わりをもつようになったんです。岡山に引っ越してきたのも、彼らの最後に寄り添いたいという思いがあったからなんです。逆に関わる限界を思い知らされたんです。こんな近くにきたのに、自分にできることはあまりにもない。私ってここまでしか関われないんだってことがわかって。極論をいえば、何人が連れ出して社会で暮らしたかったんです。でもそんなことでもしない

し、自分の生活だってぎりぎりなのに。(笑) それに高齢の不自由な人達を出して一緒に暮らしたって、それが彼らの幸せかどうかというのはわからない。社会復帰ってなんだろう。だから私なりに精一杯できることをやるしかない。

そういう感情をもよもやさせたころに、研究したいと思ったんです。研究するのも1つの関わりです。ただ研究者っていうのは深くかわりすぎちゃいけない面があって、ちょっと距離を持って俯瞰しないといけないんです。私は25才の時に大島青松園に20年ぶりくらいで行ってか

ら研究しようと思うまでにまた20年かかったんです。それほどまでに彼らと深くつきあったんです。近くに来て、ふーっと距離ができて、あ、今なら研究できるといったんです。ある意味、彼らが私にとって歴史になったというのかな。今は両方ですね。ハンセン病の回復者だから聖人みたいにはぜんぜん思っていないし、普通のおじさんおばさんたちで、けっこう我が儘だし、ケンカもするし、こないだも電話でどなったんです。「そんなことありませんからね！」って。でもそんなことができるのも、私のようなアウトサイダーのよういてちょっと親戚のような者の役割っていうのが確かにあると思うんです。まあどこまでできるでしょうかね。私のモチベーションはそんなところですね。

誰かに言われたのは、なんでそこまでやるの？と。当たり前ですけど、誰からもお金もらってわけでもなく。瀬戸大橋って1往復すると3千円なんです。それを月2回やるっていうのは、余裕があればいいんですけど、どうしよう今月、っていうときでも行くわけです。でもこの誰にもお金もらってない感じがいいんですよ。頼まれてやってるわけではなく、私がほんとに好きで行きたくて行ってるわけです。あなたの中の孤独感があるよねって言われたことがあって、たしかにそうですね。それがハンセン病回復者たちの日々を前を向いて生きていこうとした力。そこから私も力を得ますからね。そういうものを重ねあわせて通いつづけ、関わり続けるのかなって思います。ただ好きなんですよ。

りゅうりえんれんの物語

——途中で聞くのをやめられなくなりました。

●よく車に乗って聞いていたら、着いてしまつて、ついつい最後までそのまま座ってききましたと言われます。いやいや、80分以上のドライブの時に聞いて下さいって言うんです。

(6) 名前のない新聞 No.226 / 2021 年 11・12 月号

——このきっかけはたまたま茨木のり子さんの詩を読んで？

●そうですね。茨木のり子さんとはお会いしてないんですけど、10代の頃に存在は知っていて、直接のきっかけは中川五郎さんです。五郎さんが「自分の感受性くらい」に歌をつけてうたっていてなんてかっこいいんだろうって思いましたね。90年代のまた歌手活動を始めた頃です。当時は新鮮でした。70年代のまおっさんになって、あのエネルギーで歌ってるわけです。うわーかっこいいと。で、その詩が茨木のり子だって気づいて。私も茨木のり子を少しずつ歌うようになったんです。茨木さんはまだ生きてらしたので、こういうふうに歌いたいですと許諾を得るためにデモをお送りしたんです。その時の追伸に、実は金素雲の孫ですと書いたんです。というのは、茨木さんは40代後半のころに医者だった旦那が死んで、子供もいないんです。それで自分のそれこそ孤独を埋めるために、50で韓国語を学びはじめたんです。すっかりマスターして、そのあと翻訳も出してるんです。50から新しい言語ってできます？ ある程度やった言語ならできるけれども、イチからですよ。茨木さんはなぜ朝鮮に眼を向けたのかということ。「ハングルへの旅」というエッセイに書いてられて、10代半ばに出会った金素雲氏の岩波文庫「朝鮮民謡選」に出会ったからだ。あれで私は朝鮮への眼が開かれたんだと書いてたんですよね。それは私からしたら、え、うちのじいさんやんか！うちのじいさんが茨木のり子に影響を与えたって震えますよね。そして私が茨木のり子の歌をうたっていると。運命を感じたわけです。茨木さんに手紙を書く時に最初からその事を書くといやらしいですよ。でも書かないのも不自然だなと思ったんですよ。やっぱりお伝えした方が、茨木さんにもいいだろうと思って、追伸です。ところで、とちよろって書いたんです。そして数日後に返事が来て、便せんに6Bの鉛筆で書いたもので、あなたが金素雲さんのお孫さんだと知ってびっくりしました。私の朝鮮への眼を開かせてくれたのはあなたのおじいさんで、と書いてたんです。

あとから聞いたら、もうその頃は茨木さんは身体が弱ってて自分で手紙を書くことはなかったんですって。代筆してもらったりして。でも御自分で書かれたので、貴重な手紙です。私はそれをいただいて、茨木さんの曲を2つ入れたCDを出して、ちょうど当時子供を産んだんです。最初の子供を。それでバタバタしてて、ちょっと子育てがおちついたら茨木さんに会いに行こうと思ったんです。そしたら亡くなったんです。それで私は、



あ一間に合わなかった一と思って、とってお会いしたかったのが茨木のり子さんでした。途方に暮れていたなら、郵便受けに茨木さんからの手紙が届いたんです。日本の郵便事情って正確だとももったのに遅配？と。なんだらうと思って開けたら、生前仲良くしてくれてありがとうって、お別れの手紙だったんです。亡くなる前にちゃんと準備して、日付だけ入れればいようになっていると、それを200何十通か出すように指示してあったんです。茨木さんは子供がいなかったで、甥御さんに託して、その住所録に私の名前があったたわけです。しかも私の住所のそばに、私のライブ評の記事が切り抜かれて挟んであったんです。茨木さんは沢知恵というのを覚えていて、わざわざ新聞に載ったのを切り抜いてたんです。それで手紙が来て、私はそれを握りしめて、たった1、2度やりとりをただけの私にも送ってくださることに感激しつつ、茨木さんからバトンを受け取った気がしたんです。私もバトンの端っこを握りしめて走って行こう、歌って行こうと、子供をおんぶして空を見つめておもったんです。郵便受けの前で。

そうこうしてるうちに、宮崎治さんというその甥御さんと誰かがつないでくれて、彼が言うには、茨木のり子さんが亡くなったあとのサイドテーブルの一番上に、わたしから送ったデモのCDが置いてあったんです。それをなんだらうと思って車に乗った時にかけて聞いてみたら、すごく気に入ったというんです。茨木のり子さんの詩ってみんな暗く歌うんです。シリアスに。でも私はそうじゃな

い。茨木さんの詩ってどこか深刻そうで、なんていうかユーモアがあるっていうか希望を感じるんです。ですから私は明るい曲調で歌ったんです。「わたしが一番きれいだったとき」を。それを宮崎さんが聞いて気に入って、宮崎さんが住んでた家にお招きいただいたんです。宮崎さん夫妻がいらして、茨木さんお手製のレシピのカレーをご馳走になって。その時ぼろっと、いつか「りゅうりえんれんの物語」を歌ってみたいと思ってるんです、と話したんです。そういう壮大な夢をもってたんですね。

そしたら夫婦で驚いて、群読とかする人はいたけれど、ピアノの弾き語りはやっと、と。あまりにも長いしね、と。他の話もいっぱいして。

するとすぐに、宮崎治さんのお連れ合いから届いたんです。あれがなかったら、私やってないと思います。読めない漢字がけっこうありますからね。地名もあるし、古い言葉もあるしで。中学生向けにつくられたテキストがあって送ってくださったんです。その年のクリスマスですよ。安部一次政権の時の教育基本法が通ったんですよ。私は母親になってまだ1年ですけど、いてもたってもいられず、日本はまた戦争をする国になるんじゃないかと思いました。そしてクリスマスの下北沢のライブで、「りゅうりえんれんの物語」を予告なしでやったんです。あそこは季節公演で、みんな家族連れで来るんです。その日、よりによって最前列に小学生がふたり座ったんです。最初の3曲くらいはクリスマスの歌をうたいました。そして、突然言いました。「すみません、今日は予告してなかったんですが、今から長ーい1曲をやります。寝ていいです。クリスマスにふさわしくないかもしれないけど」と言ってやったんです。そしたらね、たぶん小学3、4年生だと思うんですけど、じーっと最後まで聞いてましたね。私は寝ていいよと言ったけど、そのふたりをなんとか最後まで持たせたいと。このふたりをあきさせない「りゅうりえんれんの物語」を演じてみせるぞというのがどっかあったんでしょうね。そして終わったあと、もう慟哭ですよ。14年間を80分で生きたんですから。毎回鳴咽なんですけどね。

茨木さんはあれを何かに突き動かされて35才で書いたんですが、私もちょうど35才の時に演じたんです。歌手の沢知恵を後生に伝えてもらえるんだったら、「こころ」と「りゅうりえんれん」の歌ですね。それくらいの作品です。

■連絡先■

<https://comoesta.co.jp/>



←中川五郎さんと共演

←腕組みしながら考える